

脳は がんばっている

作家 三木卓

○月○日

腰痛にうなりながら、池谷裕二「単純な脳、複雑な「私」」(講談社)を読む。池谷さんは、脳科学の専門家で、よくと同じ静岡県出身だが、この本はかれの母校である藤枝東高へ出前授業をやったときの記録をもとにまとめたもの。一読、猛烈におもしろいので驚く。

脳というやつは、ぼくにもひとつつついているが、こうして読んでみると、なかなかニュアンスに富んだものであることがわかる。たとえば、ゴルフのパターが思うようにきまらないのは、当人の努力が足りないことばかりでなく、脳自身のゆらぎのせいがあるので、そうなるのだ、という。

いくら「おれ、努力が足りねえなあ」となげいても意味がないということだ。そのゆらぎは、いつてみればノイズということになるが、しかしこのノイズがあるために、写真にとっても写らないような暗いなかでのものの形が見えたりするらしい。つまりわるいことばかりではないのだ。

ゆらぎがあるために、定期のコースから外れたもつと優れたコースを見つけ出す契機をもつことも出来るし、さらに脳の創発性にも関わる。

そういうものかも知れない。ぼくは脳というやつがいろいろ厳密な働きをしていると、なんとなく思いこんでいた。しかし、そもそもは、各動物の器官をより

効果的につかったり、転用したりしたものだから、最終進化形である生きる人間にとって当然アバウトなところがあるということになる。言葉なんて、そういうアバウトぶりの上になり立っているわけだが、その方が人間が生きていく上で具合がいいから、そうなっている。またそれが発展の余地にもなっているのだろう。

冷徹な客観的認識ということは、脳はあまり考えていない。認識できないものは存在しない、としてしまう。まことに、ぼくにふさわしいような、いいかげんなところがあるので、これを基礎にして科学的な認識など不可能ではないか、と想着してしまうが、たしかにこの宇宙には人間には及びもつかないような事や構造があつて、われわれは、ノーテンキに生きているということは充分あると思う。ダーク・マターとかダーク・エネルギーなんて、人間がその存在を探

知できたのは、重力の存在だけで、あとは皆目わかっていない。ほんとうはぼくらは世界のありのままの姿とはおよそかけはなれた姿を握りしめているのかもしれない。

しかし、池谷さんは、人間の脳にはフィードバックする能力があるという。脳は反省して認識を追いつめていく作用を持っている。脳は脳なりにいろいろ認識を詰めていく方法をもっている。だからそれなりに発展し、成果をあげることが出来る、研究や学問がなりたつ。

なるほど。脳は自分だって観察を可能にする力をもっている。だから人間の進化・発展にかかわることが出来ているのだ。

だが、本質的には、ぼくらが闇の中に投げ捨てられた嬰兒であることに変わりはない。ぼくの脳はもはや観念しているが、池谷さんの脳はがんばっている。

オン・ザ・ロード

text by Taku Miki
illustration by Pato Yanagihara

みき たく / 1935年生まれ。早稲田大学ロシア文学科卒業。出版社勤務を経て、文筆生活に入る。主な著作に詩集『わがキディランド』他、小説に『鶴』、『野いばらの衣』(講談社文芸文庫)、『裸足と貝殻』(集英社文庫)他、評論に『北原白秋』(筑摩書房)他。